

翌朝は6時40分にNHKに到着することになっていましたが、寝坊しないようにと、徐々に緊張しました。早朝の薄暗い中をNHKに到着すると、まずスタジオ前の化粧室で、初めてのお化粧を経験しました。7時からスタジオ入りしてリハーサルが開始です。約1時間のリハーサルが終わると、このコメントを短くしようとか、あの解説を加えようとか、最後の打ち合わせを行った後、休む間もなく本番が始まりました。

最初に、二つの事例がVTRで紹介されました。

(1) 81歳で早期肺がんと診断された男性が、孫がインターネットで調べた情報によってピンポイントの放射線治療を知り、無事治療を終えて今も元気にしておられるという事例、(2) 進行した口腔がんと診断された50歳代の男性が、化学放射線療法で治療されて、食べたり話したりという口腔の機能をうまく残して治癒したという事例。

スタジオには、いつもの二人のアナウンサーに加えて、関西の患者会「かざぐるま」の結城富美子さんがご一緒でした。結城さんは、骨の転移による下半身麻痺が起こって肺がんが発見され、余命2ヶ月と告知されたにもかかわらず、約3年たった今もお元気であるという、びっくりするような経過の方です。結城さんは、放射線治療を受けるまではそれがどんな治療なのか、情報不足で不安であったことなどを話されました。

私は、放射線治療の技術や装置の進歩によって、ピンポイントで照射できるようになってきたこと、放射線治療による全身の副作用はあまりないこと、その代わり治療した部位に応じて局所的な副作用が起こりうること、高齢者にも優しい治療法であること、頭頸部がんなどは切らずに治すことで機能障害を最小限にできること、抗がん剤との併用で進行したがんでも治癒率が上がっていることなど、放射線治療の概略を説明しました。

その後で、また別の事例紹介がありました。

(3) 乳がんの骨転移で放射線治療を受けて、疼痛緩和により日常の主婦としての生活を取り戻した女性の事例、(4) 腎臓がんの恥骨転移で、歩けないくらいの痛みを苦しんでいたのに、放射線治療により痛みが消え、2年後には骨もきれいに再生していて、庭仕事など不自由なくできているという事

例。

この2例の放射線治療を担当した先生からは、治療で痛みを軽くするだけでなく、今までどおりの日常生活ができるようになれば生活の充実感も高まるなど、放射線治療の効用が説明されました。

結城さんは背骨の転移で動けなかった体験から、放射線治療が有効だった御自身の経過を話されました。

それに続いて私が、骨転移の他にも腫瘍による神経の圧迫や気管の圧迫などが、放射線治療によって腫瘍が縮小すると、症状を緩和できることなど、緩和的治療における役割を説明しました。

その後、放射線治療の専門医が少ない現状が紹介され、先週開催された放射線腫瘍学会での「専門医をどうやって増やすか」というシンポジウムの白熱した討論の様子がビデオで示されました。

結城さんは患者の立場から、もっと放射線治療専門医が増えて身近に放射線治療の情報が欲しいと発言されました。私は学生教育の重要性や、学会の努力などを紹介しました。

というようなことで、あっという間でしたが、番組終了の9時半になった時には、心から安堵しました。その後、職員食堂のモーニングセットを食べながらの打ち上げ会で、スタッフ一同と話が盛り上がりました。

今回の番組では、放射線治療の話題がきちんと取り上げられて、放射線治療の特徴などを紹介できたことは、視聴者にとって有意義だったでしょうし、専門医の我々にとっても励みになったと思います。

番組を見られなかった方は、どなたかが録画されているビデオを、是非一度ご覧ください。

また、私たちと同じような活動をしている結城さんと出会い、お話できたのもとてもよかったです。

先週の学会の際に、「市民のためのがん治療の会」や「がん患者大集会」で活動している、古くからの友人の市立長浜病院の伏木先生と話していたら、

結城さんのことはとても良く知っていて、患者会「かざぐるま」の運動を支援していることを聞きました。

早速、結城さんに学会場からメールを書いてご挨拶した次第です。人の縁は、こうやってどんどんつながって不思議なものです。

いつか皆さんにも、結城さんや伏木先生をご紹介できると思います。

理事長 廣川 裕

●シリーズがん療養生活の基礎知識 AtoZ

在宅医のつづき⑩

今回は「告知の問題」について少しお話してみようと思います。

以前は患者さんにご自分の病状をよく理解していただいた上で、適切な治療（緩和のための）を受けていただくためには、告知は、曖昧にできない問題です。

告知というは医師が患者さんに対して、一方的に病名や予後の説明をするドラマのワンシーンを連想する方が多いと思いますが、在宅では患者さんが知りたいと思っていないのに、あえて「悪い知らせ」をすることはあまりありません。

在宅では、患者さんが、ご自分らしく生活していただけることを最大の目標としていますので、告知に関しても、患者さんが知りたいと思っておられることを、知りたいときにお伝えするのが良い告知の方法と考えています。

ご家族の中には、患者さんには病気のことを一切知らせないで欲しいと希望される方がおられますが、患者さんが知りたいと思っておられることを、隠すことは、かえって患者さんを不安に落としきれ、悪い結果につながるこ

とが多いので、患者さんからご質問があった際には、きちんとご説明することをお勧めしています。

理事 田村裕幸

●Dr. 津谷の「がん患者の在宅療養は任せんさい」

今回はご都合により休載します。次回は、是非復活したいと思います。
また、この会員の皆さまから、こんな情報が欲しいというご希望がありましたら、是非ご連絡をください。

副理事長 津谷隆史

●「がん患者さんのためのQ&A」

今回は、藤本理事の連載復活です。今回はご専門の「疼痛緩和」で気になる「モルヒネと中毒」です。

問) モルヒネは中毒になるのですか？

答) モルヒネで、いわゆる中毒を起こすことはありません。

取り扱い上は「麻薬」ですが、痛み止めとして使う場合、精神依存を起こすことはありません。

これは、中枢神経の中の受容体と呼ばれる3つの作用点のうち、精神に影響を与える点が痛みによって閉じてしまうからです。従って、痛みが存在するときには精神依存、中毒は全く起こりませんので心配無用です。

また、蛇足ですが、痛みがない場合にはモルヒネを服用すると激しい嘔吐に苦しむことになり、いわゆるヘロインや大麻などで引き起こされる快感は期待できません。モルヒネが悪用されないのはこういった理由によるものです。

理事 藤本真弓

●「会員からのお便り」

会員の S.K さんから、お便りを頂戴しましたので、掲載します。

「胃がんで余命長くない？」

私は定年退職後も、年に2回の間ドックは欠かさず受けていましたが、9月の胃のX線検査で、「胃炎と隆起性病変の疑い」と診断されました。

「内視鏡手術で取り除ける大きさですか」の医師への質問に、「かなり大きいので、精密検査の結果によっては開腹手術が必要」との意見でした。

父が53歳の若さで胃・肝臓の進行がんで亡くなっており、「私もか」との思いが一瞬頭を駆け巡りました。

この直後に、「市民のためのがん講座」（主催：NPO法人がん患者支援ネットワークひろしま）があることを知り、早速受講して会にも入りました。

この時の講師のお一人が、広島大学病院光学医療診療部の田中信治先生でした。田中先生の講義で、内視鏡の技術が進み、今では開腹手術をしなくてもがんを治療できることを知り、万が一の場合でも大丈夫だろうとの思いになりました。

そこで事務局に電話して、「内視鏡での検査結果、手術が必要な場合を想定し、最初の検査からを田中先生にお願いしたいのですが、大学病院で田中先生をご指名することができるのでしょうか」と相談に乗っていただきました。

すぐに事務局から田中先生に連絡を取っていただいたところ、翌日に直接、田中先生からメールが入りました。

「胃の検査と考え方、診療を含めお話をさせていただきます。ご都合のいい日をご連絡ください」というご丁寧なメールと頂戴し感激しました。

そして、幸運にもその2日後に内視鏡の検査を受けることができ、その場で「大丈夫ですよ」と言われました。

検査前には胃の進行がんを想定していましたので、まさに「天使からのお告げ」の気分でした。

その後の詳しい検査結果の説明で、「ピロリ菌はいるが、投薬は不要」と言われ、胃の内視鏡カラー写真もいただきました。

さらに、先生にお願いして、年一度内視鏡検査を受診できることになり、大変ありがたく、感謝の気持ち一杯で病院を後にしました。

こうして失望の谷底から、澄みきった青空を飛ぶような晴れやかな気持ちに戻ることができたのは、①市民講座での田中先生との出会い ②事務局の誠意ある対応 ③暖かくご親切な田中先生の速攻の対応 それと④Eメールで、田中先生・事務局と詳しい状況報告・円滑に連絡できたことなど、多くの幸運に恵まれていたことだと感謝しています。（Eメールができて本当に良かった！）

このたびの一件で、あらためて健康の大切さを感じています。今まで以上に、「病気になるない生き方」を良く学び、できるところから愚直に実践しつづけることを心がけています。

そして、生かさせていただいていることに感謝して、これからの私の持ち時間を大切にに使わせていただこうと思っています。

S. K

●「スタッフ養成研修」いよいよ修了

皆様にご支援いただいているスタッフ養成研修も、残すところ、あと一回になりました。

今回の10名の受講者に対し、当会や広島県内外から、医師、ホスピス・ボランティア、県緩和ケア支援室長、在宅看護のリーダーなど、多彩な講師陣にご教授をお願いし、熱意を持ってご指導いただきました。本当にありがとうございました。

研修修了時には、受講者の皆さんが、多くの知識とがん患者さんやご家族からの相談対応ができる優秀な能力を習得され、本会の相談員としてご活躍をお願いしたいと思います。

また、次号で研修受講者の皆さまに、受講の感想や今後の抱負など語って

いただきます。

早速、12月4日に当会が実施する、がん電話相談「がん110番」で、受付ボランティアとして参加していただく予定です。

これからも、ご支援を宜しくお願い致します。

理事 中原秀子

●広島県内のがん関係イベント情報

○がん電話相談「がん110番」

日時：2005年12月4日（日）午前10時から午後2時まで

電話（携帯）：090-6419-4535 090-6432-7424

連絡先：事務局（TEL/FAX 082-289-0610 E-mail：info@gan110.rgn.jp）

○生と死を考えるセミナー 『よく生き よく笑い よき死と出会う』

日時：2006年1月22日（日）午後1時開演

場所：ふくやま芸術文化ホール・リーデンローズ

主催：びんご・生と死を考える会

テーマ：「死への準備教育」

第一部「いのちの尊さを考える ～『死への準備教育』とは～」

講師：アルフォンス・デーケンさん

（上智大学名誉教授／びんご・生と死を考える会名誉会長）

第二部「大人と子どもが実感できる『いのちの尊さと大切さとは』」

講師：高木慶子（たかき よしこ）さん

チケット専用電話：090-1330-7998

○平成17年度 第6回「市民のためのがん講座」

日時：2006年1月28日（土）午後3時から午後5時まで

場所：広島市中区地域福祉センター

テーマ：①がんの痛みと対策（県立広島病院麻酔集中治療科 藤本真弓先生）

②転移がんの基礎知識（元順天堂大学医学部 廣川 裕先生）

連絡先：事務局（TEL/FAX 082-289-0610 E-mail：info@gan110.rgn.jp）

参加費：会員 800円 協力団体会員 1,100円 一般 1,300円

○市民公開講座「がん治療の経済学」(仮)

～いくらかかるか いくらもらえるか～

日時：2006年2月11日(土・祝) 午後1時30分から午後4時(開場：午後1時)

場所：広島市中区地域福祉センター

内容：現在、すぐに役立つ魅力あるものを企画中

連絡先：事務局 (TEL/FAX 082-289-0610 E-mail : info@gan110.rgn.jp)

※企画運営スタッフ募集中！

市民公開講座の企画・運営に参加いただくスタッフを募集します。

経験は不問です。当会事務局までご連絡ください。

●編集後記

ニュースレター第11号はいかがでしたでしょうか。

今回は前回に続き、会員の方からのお便りをご紹介でき、がんへの不安と当会の取組みの一端をご紹介できたのではないかと思います。今後とも皆様のご期待に応えていきたいと思ひます。

毎回お願いしておりますが、当会の運営を良くして行くために、会員の皆様からのご意見、ご質問等を募集しております。是非、担当者までお寄せください。

次回は、12月号と新年号の合併号とさせていただきます、理事長の年頭の挨拶など読み応えのある内容となる予定です。ご期待下さい。

(浩)

■発行：NPO法人 がん患者支援ネットワークひろしま 事務局

<http://www.gan110.rgn.jp>

■お問合わせ：info@gan110.rgn.jp

■Copyright：NPO法人 がん患者支援ネットワークひろしま
